

今後の委託プロジェクト研究に係る研究戦略検討会（第4回）

委員発言要旨

1. 前回議論へのコメント

特になし。

2. 研究戦略に関する意見

I はじめに

- 「農業の姿を見通し」と書いてあるが、農村も含まれるため「農業・農村の姿を見通し」とすべき。

II 収益力向上技術

- 水田における園芸作物等との複合経営について、研究目標の比較のベースとなる基準が地域の複合経営となっているが、稲作中心の経営をベースとして目標設定する方が妥当。
- 園芸作物複合型の水田の輪作体系の目標について、「地域における複合経営の平均収益と比べ3割以上向上させる」とあるが、「収益」という言葉は収入か利益か不明確であり、利益とすることが妥当。
- 花きの鮮度というところで、コールドチェーンの研究も含めるべき。 研究課題として入れると、品種の開発だけでなく鮮度の向上技術の開発にもつながる。
- 我が国の園芸施設の建設コストは高すぎる。施設の設置コストの低減技術や作物毎に最適な施設のコストや形態を研究することも重要。
- ロードマップのSIP対応事業のマイルストーンの部分について、「トマトの生産性を50%以上向上」、解決に向けた取り組みの中では「生産性、収益性の向上」と書いてあるが、目標が不明確な印象を受ける。また、水田を野菜に転作するためにはコストがかかる点についても考慮する必要がある。

III 生産流通システム革新技術

- 除草ロボットについて、除草にかかる労働時間についての目標として、中山間地域で5割以上削減、平坦地で2割以上削減という目標が掲げられているが、5割や2割がどのような根拠に基づいて設定されたものか明確化する必要がある。そうすれば、

その目標が高い目標かどうか分かりやすい。

- 日本の畜産をどの方向に持っていくのかが分かりにくいので、10年ビジョンの中でもう少しくリアにすべき。
- 農業従事者がどんどん減っていく、足りないということが書いてあるが、量だけでなく農業者の質的な面からも検討が必要。人数が足りないから「ロボット」では論理の飛躍があり、規模拡大や収益性の強化にはつながらないと思う。
- 地域の6次化に当たっては、農林水産省でやっている「6次産業化プランナー」、内閣府の「食の6次産業化プロデューサー」などと一緒に、その地域独自の生産流通システムを考えていくということが必要。
- 地域政策の部分にかかわる研究が非常に多い。地域政策に対応した研究というイメージをもう少し鮮明にされたほうが対外的にわかりやすい。
- 流通に関する事項が見られないが、「生産流通システム」とするのであれば、流通に関する事項を補強すべき。
- 農産物ブランドの部分に畜産物も含めるべき。
- ブランドのサイエンスによる裏付けというのは、技術的に品質を向上させるような面からと、社会科学の面からいうとマーケティングサイエンスのような分野の科学に裏付けられたものがある。最後に全体のまとめに関連する部分で、そのような社会科学研究の専門家の参画を得て研究を進めることも重要である。
- 10年後ということであれば、家畜ふん尿について悪臭を低減するだけではなく、未利用資源と位置づけて製品化するなど畜産経営に貢献するような取組をやるべき。

IV 産地強靱化技術

- 気候変動については、必ずしもマイナスだけではなく、ある意味チャンスも出てくる。北海道だったり東北の農業現場では、温暖化の新たな可能性を追求する動きもある。新たな可能性を探る研究も必要。

V 留意事項

- 「経営効率の最大化に向けた検討を行う」ということになっているが、あまり使わない言葉なので、表現を変えたほうがいい。
- 技術の導入及び普及の促進について、「農業者、普及組織、実需者、流通・加工業者等の研究コンソーシアムへの参画を図る」とあるが、農村部分の技術の強化では例えば土地改良区のような組織も含まれると思うので、農業・農村の実態に即した戦略

を作成するという意識で整理すべき。

- 「『農林水産業・地域の活力創造プラン』等で掲げられた農業・農村の所得倍増や食料自給力の確保」とあるが、所得倍増ということであれば、例えばG Iを10年目標で掲げることも妥当と考える。

3. その他

特になし。

(以上)